

國學院大學学術情報リポジトリ

Alice T.

Joko氏(ブラジルア大学日本語文学部・外国語・翻訳
学科、日本語日本文学専攻准教授)
ブラジルにおける日本語教育の諸問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, マリ子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001453

大学院短期招聘研究員講演会紹介

Alice T. Joko 氏

(ブラジリア大学日本語文学部・外国語・翻訳学科、日本語日本文学専攻准教授)

「ブラジルにおける日本語教育の諸問題」

久野 マリ子

平成28年度國學院大學大学院国際学術交流事業の短期招聘研究員として、11月28日（月）～平成29年1月13日（水）までの30日間にわたり、ブラジル連邦共和国ブラジリア大学（UNB）日本語文学部・外国語・翻訳学科日本語日本文学専攻准教授を招聘した。なお、冬期休暇を含むため、実際の滞在日数は30日を超えている。ジョウコウ先生は国立ブラジリア大学の日本語科の主任教授として、ブラジルにおける日本語・日本語教育の指導者として活躍され、日伯国際交流にも重要な役割を果たしておられる。

研究テーマは話し言葉に関する研究で、ポライトネス研究、日本語・ポルトガル語の音韻体系の対照分析などがある。今回の招聘の目的は、ブラジルにおける日本語の位置づけという世界でも最も日本語が継承されている国における日本語教育の現状、ジョウコウ先生が研究しておられる日本語とポルトガル語との言語接触や、ブラジルにおける日本語の保持・継承や、ブラジルでの日本語教育の問題について大学院生に教示頂くことである。また、今後、日本語とポルトガル語との対照研究に関する課題や研究方法についての検討を久野と共に進めることである。招聘期間中には大学院の久野担当する論文指導演習のクラスで、ブラジルの高等教育機関における日本語教育や、ポルトガル語と日本語の言語接触に関する対照研究について講演を3回依頼した。また、その他に12月22日（木）文学部講演会で講演をお願いした。「ブラジルにおける日本語教育の諸問題」と題する講演は、広く一般の聴衆も参集し、講演終了後も質問の列ができるほどの盛況であった。

本招聘には直接関係しないが、久野も分担者として参加している学術振興会科学研究費「南米日系社会における複言語話者の日本語使用特性の研究」基盤研究（B）研究代表者松田真希子准教授（金沢大学）による学術研究会でも招待ポスター発表を行った。ブラジルの大学制度教育制度の違いや多民族国家の中での第2言語習得の問題、日系移民の抱える日本語の問題を例に、大学院生に国際的視野を持った研究や国際学術交流の重要性を実感させ、広く紹介して頂くこととなったことは大きな成果であるといえる。

以下、「ブラジルにおける日本語教育の諸問題」についてまとめる。

ブラジルにおける日本語教育はその多様性ゆえにかなり複雑な問題を抱えているということができる。

ブラジルは約150万人にも及ぶと言われる、世界で最も多い日系人の人口を有していて、それがブラジルならではの日本語教育の特殊性に直接関わっていると考えられる。

大学で行われている日本語教育でまず挙げられるのは日本語専攻コースである。これは日本語・日本文学研究を目的とするサンパウロ大学の専攻コース（1962年設立）から始まって、20世紀に5校、今世紀になってさらに3校の公立総合大学に現在設けられている。その他にも単位が取得できるレギュラーコースとしての日本語コースや、学生以外に一般人も受講できる課外講座なども入れると、20校以上にのぼるという。加えて、今年から国際交流基金が日本留学を目指す理工系の大学生を対象に、すでに日本語教育を行っている五つの連邦大学に新しい日本語講座を設置したため、高等教育機関における日本語学習者数はさらに増加している。

ブラジルの住民は、先住民のインディオ、最初に開拓したポルトガル人、さらに16世紀後半から奴隷としてアフリカから強制的に連れてこられた黒人、19世紀の奴隷解放後はそれに変わる労働力としてドイツやイタリアからの移民、20世紀のはじめからは日本移民などによって形成されていて人種のるつぼといわれる所以である。

それぞれの文化が互いに混じり合って同化し、結果として一つの独特な共通文化を現在もなお形成中の文化多元主義社会である。国語はポルトガル語だが、地方によっては今でもドイツ語、日本語やイタリア語が話されているところもあり、それぞれ、かなり現地語が混入していて、本国とは違ったバラエティを生じ、日系コミュニティの場合、話している日本語はコロニア語と呼ばれている。ブラジルでは日系人全体の集団は日系コミュニティではなく、日系コロニアと呼ばれている。

日本語専攻は文学部の外国語・翻訳学科に属し日本語部門には専任教師が10名いる。その内訳は日本の大学を出て、ブラジルで修士と博士の学位取得者が2名、日系2世2名、準2世と呼ばれる、日本で生まれてブラジルで教育を受けた者が1名、非日系ブラジル人4名、イタリア人1名で、この構成にはブラジル社会の多様性が反映されている。

ブラジリアは日系人口が多くないので、日本語学習者はほとんど非日系人である。ブラジルでは、日系人以外のブラジル人を非日系人とよんでいる。

ブラジリア大学の事情として、日本語だけを勉強すればいいのだと思って入ってくる新入生も多いが卒業する頃には学習者は半分以下になっているというのが現状がある。

学業中退の背景

- 日本語習得の難しさー漢字ができないと参考書が読めない等
- 卒業してからの就職先の問題
- 自助努力の結果が出ないため、モチベーションの低下
- 言語能力中心の教授法ー日本語でコミュニケーションができない
- 教材・教員の問題ー古臭い、魅力がない
- その他

学習者がやめていく背景には日本語習得の難しさだけではなく、卒業してからの就職先の問題や現行のカリキュラム及び教授法にも問題がある。

この現状を改善するには、大学側は学生の自助努力だけに頼らず、効果的な日本語教授法へとパラダイムシフトをする必要があり、その新パラダイム構築にあたっては、まず大学が社会に送り出す日本語教師に求められている知識や能力を把握することが必要となる。

まず考えられるのは

- 言語能力：音声と意味と文法の知識
- 社会言語能力：場面によって言葉を適切に使い分けることができる能力。
- 社会文化能力：仕事、交流、社会生活などのインターアクションのための能力。

以上の3能力であり、この総合がインターアクション能力である。現在行われている、構造主義に基づいた言語能力偏重の教授法が改善を迫られていることは学習修了時の結果に裏付けられている。

ブラジルにおける外国語習得の観点というアプローチからみた日本語研究はほとんど未開地の分野であるといえる。ポルトガル語を母語とする学習者にとって日本語を習得するとはどのようなことなのか、習得のメカニズムを探究するには言葉に関するさまざまなデータを取って、それを分析していかなければならない。日本語専攻の大学が増えている現在、研究者同士のネットワークを強化して研究結果を共有し、日本語学習に応用することが今後の課題となっている。

次に、日本語学校の問題点

まず継承語の定義であるが、日本語学校の学習者は3世、4世が多く、生活言語はほぼ全員がポルトガル語である。継承語の定義を、生活言語が日本語であり、学習言語が現地語とするのであれば、言語形成期からすでに現地語を母語とする日系子弟の日本語教育を

継承語と呼ぶには無理があるのではないか。

次に保護者の日本語保持に対する価値付けの程度に対する認識の問題がある。すなわち、英語教室になら高い月謝を払うが、日本語は月謝が上がると親がやめさせてしまうという現象である。これは日本語を継承することに対する意識の低さにかかわっていて、保護者はわずかな月謝を払って一応日本語学校に行かせることによって自分の責任を果たしたと考えていることにほかならない。

また、学校側が考えなければならないことの一つに、教師の問題がある。

(ヘリテージ教育では) 語学力があるという意味で一世教師が適任者であると思われるが、実際は現地校で育つ子供たちと心情的にも、行動パターンにおいても、また価値観においてもずれがあり、そのために授業がうまく行かない場合が多い(佐々木倫子)

以上見てきたように日本人が移住者としてブラジルに定住した時点では、家庭内でのコミュニケーションの手段として、日本語は生活語であった。加えて、コーヒー園などの労働力として雇われていたころは、周りの現地人はカボクロと呼ばれるほとんど読み書きのできない非識字者であったため、日本語を教えなければ自分たちの子供もカボクロといわれる下層の無知な田舎者になってしまうという懸念があった。しかし、時代が代わり、日本語学校の生徒は3世・4世で、ほとんどが高学歴の親を持ち、都会暮らしをしているような現実では、ブラジルの日本語教育に継承語としての教育理念を持たせることは難しいと思われる。

日系人が子供に日本語を学ばせるのは、日本人というルーツを忘れないで、誇りを持ってほしいと願う気持ちからだと思われる。そうであるなら、継承語ではなく、継承文化教育の中で日本語も学習するというのがより親の思いにかなっているのではないだろうか。

継承文化教育としての日本語はどうあるべきかということを現場で実践している教師と協力し合ってプログラムを開発することもブラジルの日本語教育研究の課題の一つではないだろうか。

主要参考文献

佐々木倫子(2003)「3代で消えないJLHとは?—日系移民の日本語継承」母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究